

衆生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2015 年 8 月 1 日 発行
(通巻 466 号)

現代座レポート No 63

- ・『武蔵野の歌が聞こえる』 (1)
- ・出演者・ものがたり・ブックレット (2)
- ・歴史に埋もれた協同 … 相良 孝雄 (3)
- ・『紙芝居』の裏側にひそむ戦争の姿 (4)
- ・海外植民地のコドモたち 1 (5)
- ・NPO 現代座を支える人々 第 20 回 織壁哲夫さん (6)
- ・平右衛門橋・日本力行会講座・活動日誌 (7)
- ・お知らせ (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者: 木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987

合唱構成劇

武蔵野の歌が聞こえる

武蔵野を協同の大地に変えた

川崎平右衛門



昨年公演してご好評をいただいた『武蔵野の歌が聞こえる』を再演します。

これは江戸時代、不毛の大地だった武蔵野台の開拓に挑み、農民たちの助け合いの力を引き出して新田開発を成功させた「川崎平右衛門」を描いた合唱構成劇です。

地元の歴史を芝居にしてほしいという地域の方の声から、「川崎平右衛門プロジェクト」が生まれ、4年間の勉強と準備を経て昨年9月に上演にこぎつけました。

公演を見た皆さんから「はじめて地元の歴史を知りました」「合唱が素晴らしい」などの声がたくさん寄せられ、「芝居にはこういう役割もあるのだ」と改めて教えられました。是非もっと多くの方に見てもらいたいという声に励まされて、今年も公演することにしました。

上演成功のお手伝いをしてくださるサポーターの皆さんは、今年も集まってくてくださいました。宣伝やチケット販売に、一生懸命動いてくださっています。

再来年は川崎平右衛門の没後250年になります。昨年の公演を見てはじめて平右衛門を知った方たちの中で「没後250年に向けて、もっと平右衛門さんを知ってもらおう」というキャンペーンを企画するグループが出来て動き始めています。

今年も地域で助け合いの心をつないでゆく「協同の歌声」が響く公演を創りたいと思います。

2015年9月

4(金) 14:00 19:00

5(土) 14:00 19:00

6(日) 14:00

7(月) 14:00 19:00

8(火) 14:00

開場は開演の30分前です

毎回 80 名の予約制です。
事前にお申し込み下さい。

TEL 042-381-5165

会場 **現代座ホール**

参加費 一般 3,000 円
小中高 1,000 円

2015年度 合唱構成劇 武蔵野の歌が聞こえる

脚本・演出 木村 快 作曲 福沢達郎

出演者



織壁哲夫



塚田善久

市民参加



八木浩司



木の下敬志



中村保好



黒澤義之



石川秀樹



今村純二



福沢達郎



新井紀子



岡田杏珠

ピアノ演奏



長谷川葉月



東 志 野



矢川千尋



みきさちこ

ものがたり

◆十八世紀のはじめ、日本列島は元禄大地震、宝永大地震、富士山噴火、浅間山連続噴火と相次ぐ災害で農業は大きな打撃を受けます。それに先立つ元禄バブルに浮かれていた幕府は、復興を進めることができません。

宝永大地震の後わずか十年の間に第五代將軍徳川綱吉、第六代將軍徳川家宣、第七代將軍徳川家継と相次いで亡くなり、幕府は大混乱に陥ります。

◆第八代將軍徳川吉宗が就任したとき、幕府は四〇万両に及ぶ負債を抱え、財政は崩壊寸前でした。もはや世襲の役人では幕府の改革は難しく、吉宗は大岡越前守忠相を町奉行に抜擢し、「享保の改革」に取り組みます。

◆吉宗と大岡は不毛の大地と言われた武蔵野台に、食料増産のため大新田の開墾を計画します。それまで自分の畑を持ってなかった農家の次男・三男が関東一円から集まってきました。しかし、新田開墾は思うように進みません。武蔵野は火山灰が堆積して出来た土地で、保水が難しく、その開拓は困難を極めます。その上、気候寒冷化のため天候不順がつづき、享保の大飢饉や元文の凶作が相次いで起こり、幕府の財政は再び危機に追い込まれます。

◆開墾を始めて十六年目の元文三年、武蔵野新田は完全に崩壊状態でした。大岡忠相は武士の役人に変えて、百姓の心根をよく知る多摩郡の名主・平右衛門に新田開墾の指導をゆだねます。

◆平右衛門は全農家を戸別に訪問して実情を調べ、もう尋常の手段では回復は不可能だと判断します。しかし、幕府には百姓救済の資金はありません。なんとか百姓自身が開拓の意欲を取り戻す方法はないものか。平右衛門は従来からの支配型の営農政策に見切りをつけ、百姓自身による協同方式を次々と編み出します。

◆平右衛門は老人や赤ん坊も一緒に生きたる村づくりを目ざし、全員に食料を分配し、全村一体となった村づくりをすすめます。

百姓の組合をつくり、百姓が自立できるよう努力します。やがて離村した農民も戻ってきて人口も増え、新田面積も倍増します。さらに飢饉に備えて協同の備蓄をすすめ、玉川土手には桜の苗を植えました。

◆新田開墾を成功させた平右衛門は、幕府の要請で水害に苦しむ美濃の国へ旅立ちます。玉川土手に桜が咲きはじめるころでした。

ブックレットができました



「武蔵野の歌が聞こえる」のブックレットが出版されました。NPO現代座会員であり、名古屋「友愛・協同研究会」会員でもある田中義二さんが「芝居は心の街おこし」をキャッチフレーズにした取り組みの内容を広く知らせたいと、ブックレット「協同を文化に……No.1」として愛知書房から発行してくださいました。

◆第一部「武蔵野の歌が聞こえる」の内容を物語り風にまとめました。

◆第二部「芝居は心の街おこし」地域の人々といっしょに時代を見つめ、人物像を考え、作品を創りあげていく4年間の取り組みの内容をまとめました。

◆川崎平右衛門の史跡や舞台の写真も入っています。

頒価1000円でNPO現代座とシニアSOHOで販売しています。

現代座にお申し込みいただければ、送料無料で送ります。小金井市では「かごや書店」と「大洋堂書店」でも販売しています。

◆『武蔵野の歌が聞こえる』舞台写真、上演の動画は平右衛門プロジェクトのホームページで視聴できます。

「平右衛門プロジェクト」ホームページ <http://heiemon.org/>

『武蔵野の歌が聞こえる』を読んで 歴史に埋もれた協同

相良 孝雄



さがら・たかお

協同総合研究所・事務局長
協同総合研究所は1991年に労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会が母体となって立ち上げた研究所で、現在、研究者や実践者、オピニオンリーダーなど400名の方が会員となっている組織です。特に「協同労働」を通じたまちづくり、仕事おこしを中心に、地域と生活を焦点におきながら、調査、研究をしている研究所です。行政や株式会社等だけでなく、非営利・協同セクター（NPO／NGO・協同組合・社会的企業等）の研究も行っています。

享保の新田開発を協同思想の視点で見直す

18世紀、元禄大地震（1703年）、宝永大地震（1707年）、富士山の大噴火（1707年）、浅間山噴火と災害が続く、気候は寒冷化、関東一帯の農業は大きな打撃を受け、幕府の財政は窮地に追い込まれます。そこで享保8年（1723）、八代將軍徳川吉宗は享保の改革の中心事業として不毛の地といわれた武蔵野台に大規模な新田開発を始めます。しかし開発は十年以上たってもうまく進まず、元文3年（1738）にはついに挫折の危機に直面します。開発責任者の大岡越前守忠相は、多摩郡の名主、平右衛門に開発を依頼します。

平右衛門は役人のように上からの命令で農民を強制

するやり方を改め、農民自身が自分たちで開墾し、地域をつくっていくよう指導します。この実践には、協同思想があったと、著者の木村さんは述べています。

埋もれた「協同」の歴史をもっと探したい

日本の協同思想として、大原幽学の「先祖株組合」や、二宮尊徳の「報徳仕法」が有名ですが、それよりも100年も前から、川崎平右衛門の新田開発の実践が、農民との協同で生まれていることに驚きました。このような取り組みは日本全国で、歴史の中で埋もれている実践が他にも数多くあるのではないかと考えています。それは「人間」とは、人の「間」と書くので、人と人との間（関係性）において、社会をつくるときに「協同」の視点は、必然の行動としてあったと考えられます。そして何よりも農民（弱い立場）のメンバーが協同しあうことを大切にしたい平右衛門の実践は、新田開発を通じて、「新しい社会」を協同でつくる文化であり、社会運動そのものであると感じました。

平右衛門の実践は現代社会に何を問うのか

「弱い立場の者が協同して社会をつくる」という平右衛門の実践は、現代社会でも通用する考え方です。木村さんは、「その根底には、働くものの人間的回復を原点にしている」と述べておられますが、これは現代社会で、最も大切にしたい価値の一つだと考えています。まさに労働者協同組合（ワーカーズコープ）が目指す「協同労働」の労働観と一致するからです。そのような意味で、この平右衛門の実践を深めることが、現代に

において、「労働することの意味や価値」を問い、深めるものであると感じました。

それとともに、平右衛門の実践は大衆運動とは何かを伝えています。私は人々が連帯して地域をつくり、社会をつくる原点は、何よりも人の心が動き、共感し、行動へつながっていくものであることを学びました。平右衛門という人物は「相手が何を考え、何を求めているのかを考える共感力、そして実際に形にする構想力、行動力に長けた人物」であると想像することができそうです。

武蔵野に住む者として

私は三鷹市大沢地区で国分寺崖線の高台に居住しています。野川や野川公園、国立天文台、ICU（国際基督教大学）、調布飛行場が隣接する地域です。この本を読み、自分が住んでいる地域の歴史を調べたいと感じました。この本からは「地元愛」を感じます。自分の住んでいる地域の歴史やそこで活躍した人、そしてこの地域がどのようなまちづくりにしていくのかという未来を語り合いたい住民は多くいると感じます。

私も今年から町会の厚生部の副部長となりました。自分がこの町で育つ、生活すると覚悟を決める過程で、自発的に学びたいと思ったからです。平右衛門の実践は、不毛な地であった武蔵野を開墾者の努力で人が住めるようにしたこと、その歴史があるからこそ今の武蔵野がある。だからこそ武蔵野に住む者として、敬意を表したいし、感謝の気持ちでいっぱいになりました。それが歴史を知ることの醍醐味であり、芝居を通じて、文化を伝承する実践であると感じています。

昭和のコドモが伝えたいこと 第1回 6月20・21日 第2回 8月1・2日

『紙芝居』の裏側にひそむ戦争の姿

第1回 忘れられた世代・少国民
第2回 日中戦争から太平洋戦争へ

戦後70年は戦争について考える一つの節目です。テレビや新聞ではかつての戦争をどう考えるかについて、語り継ぐべき戦争被害者の声、第2次大戦の映像、歴史的評論など、さまざまな企画が展開されています。

現代座でもわたしたちに出来ることは何だろうかと考えつつしてきました。

現代座には昭和15年から18年にかけて、大政翼賛会紙芝居部から発行された紙芝居が21セット眠っていました。これは日本児童文学者協会の会長をつとめられた川崎大治先生から寄贈を受けたものです。川崎先生は戦前、プロレタリア児童文学者として警察に拘留されながらもつねに平和を目指し、子どもたちのための文学や紙芝居の創作をつづけられました。これらの紙芝居は大政翼賛会時代に発行された

もので、すべて婦人、青年を対象とした大人向けの作品です。

「大政翼賛会は戦意高揚のために紙芝居を利用した」と批判する声もありますが、紙芝居作家たちは翼賛会の「日本少国民文化協会紙芝居部」を通さなければ作品を作ることは出来ません。現代と同じで、軍事院、文部省、保険会社等から出資者を見つけたければ制作する経費を生み出せません。あの厳しい検閲下で、作家たちは何をどのように伝えようとしたのかを読み取ることは、戦争の本質を考える上で大切なことです。現代の作家たちも、後々、退廃したモノ金時代に国民を導いたと一括して批判されるかもしれません。

第1回目の『奮へ日本少国民』は開戦直後に設立された日本少国民文化協会設立を記念した作品です。『少国民』を育てる国民学校がなぜ必要なのかを訴える内容ですが、日本国民がなぜあの愚かで無謀な戦争を容認し、また自ら戦争に赴いたのかを考える上では貴重な作品です。

第2回目は『櫛』と『爪文字』を上演しました。

『櫛』は大正から昭和にかけての、貧しい家庭の母子を描いた作品です。大正期は第1次世界大戦で、今風に言うならば「集団的自衛権」を発動し、米英仏ロシア側に荷担してドイツ相手に戦い、後方補給基地として日本の産業を大発展させ、同時に社会的格差を拡大させます。国民の側は反戦運動、生協運動を生み育て、美濃部達吉等は帝国憲法には軍部独走の危険があると警告した時代です。昭和期は一転して軍部の独走を許し、満州事変、日中戦争へと向かった時代です。

大正育ちのコドモが大きく育ち、昭和期の中国戦線に派遣されますが、中国の店で櫛を買います。子どもの頃、自分のために大切な櫛を売って運動服を買ってくれた母親へ、櫛を買って送るという話です。

『爪文字』は『櫛』で描かれた時代から4年後の昭和18年後半、ニューギニア戦線に送られた兵士たちが全滅する話です。もう『櫛』のような叙情性はありません。大本営の無謀な命令で全滅に次ぐ全滅、「大和魂」で幾度も敵を退けてきたのに、米軍の飛行機による爆撃で補給路を絶たれて孤立し、「ああ、飛行機さえ有れば」と涙ながらに玉碎します。わずか4年で破滅的な時代へ向かうのです。その2年後に日本は敗北します。映画館で必ず上映された日本ニュースでは昭和15年に「日本の生産力は米国の10分の1であることを報道しています。それを承知で東条首相は「日本兵には大和魂があるから大丈夫だ」と開戦に踏み切ります。兵士はただの消耗品でした。

平和のためには今こそこの愚かな戦争の原因を探り、国民はなぜそれを防げなかったのか、教訓を学ぶときだと思われれます。



『奮へ日本少国民』、昭和16年、国民学校の誕生を語る。 矢川千尋
『櫛』、激動の大正・昭和期を生きる母と子を語る。 みきさちこ

破滅の坂を駆け落ちるニューギニア戦線で全滅する部隊を語る。 木の下敬志

作品の時代背景を語る。 木村快

昭和のコドモが伝えたいこと

海外植民地のコドモたち1

木村快

1、海外植民地

◆敗戦は苦難の始まり

大多数の日本人にとって、戦争は昭和20年8月で終わる。だが、植民地在住者にとってはそこから地獄の生活が始まる。生まれ育った故郷を追われたコドモたちは、やがて「祖国」という名の異境の地で引揚者として放り出され、孤独と貧困の道を歩むことになる。

◆昭和20年までの日本領海外植民地

①台湾 1895年（明治28年）、日清戦争終了後の下関条約で清国から日本に割譲された。中国人や多くの先住民諸族も皇民化政策で日本名を名乗るようになり、日本人はその中に混住するようになる。

②樺太 1905年、日露戦争後のポーツマス条約により北緯50度線以南が日本領となる。昭和20年8月、ソ連軍の侵攻によって数々の悲劇が展開される。

③朝鮮 1910年（明治43年）に日韓併合により朝鮮人も日本国籍となる。敗戦後は米国とソ連の占領支配で大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に分断され、朝鮮民族に大きな不幸をもたらす。

④太平洋諸島 1919年（大正8年）、第1次世界大戦後のベルサイユ講和会議でドイツ領だったミクロネシア諸島のうち、赤道を南限とする北部分は国際連盟委任統治領として日本の管轄になる。4年間にわたる日米戦争の激戦地域となる。

⑤満州・中国 1905年（明治38年）、日露戦争後のポーツマス会議で、遼東半島と南満州鉄道付属地の租借権をロシアから割譲され、関東州と呼ばれていた。さらに1932年（昭和7年）、日本は中国東北部に満

州帝国を建国し、多くの日本人を送り込む（満蒙开拓団だけで27万人）。敗戦後は収容所で多数のコドモが病死し、残留孤児が取り残される。

◆コドモの数について

厚生省の記録では引揚者総数は320万人だが、手続なしの引揚者が30万人以上いたと言う。このうち14歳以下のコドモは100万人以上いたと推察できる。

2、ぼくの家族の場合

◆出征する父

ぼくは朝鮮慶尚北道大邱府の生まれ、国民学校は慶尚南道の海軍基地の街、鎮海邑である。

昭和12年に日中戦争開始時の徴兵率は30%前後で、家庭を持った男性は招集されなかったが、昭和19年には80%を越して、手当たり次第の招集となる。

昭和19年には海外植民地在住者は帰国が困難なため、「現地召集」という形で居住地単位で招集される。3月、父は補充兵として朝鮮馬山市の連隊に入営。父は37歳、4人のコドモがあり、母は5人目を妊娠していた。父が入営するとき、町内会で送別会を開いてくれた。おまりの挨拶で祝杯を挙げ、氣勢を上げていたが、ぼくは母の姿がないのに気づき、奥の部屋へ行つてみると、母は泣いていた。すると父がやってきて、「皆さんが激励してくださってるのだから顔を出しなさい」と言った。母は「はい」と言つて涙を拭き、一座に戻ったときは微笑を浮かべながら、出席者にお礼を述べていた。そして父は戦争へ行き、母は残った運命をすべて引き受けた。大人は表向きは静かな表情を見せていても、心の中で泣いていることもあるのだと知った。

◆硫黄島へ旅立った父

昭和19年6月、父が釜山港から出発するとき、母は父の入営後に生まれた弟の顔を一目見せようと釜山港へ見送りに行った。列車を降りて、港へ向かう兵士た

ちの隊列について歩いたという。父は気づいたらしいが、言葉をかけることができない。他にも同じような母親があつたらしく、子供を背負った数人の女性が必死について歩く姿に気づいた年配の指揮官が、「全体、止まれ」を号令し、15分の休憩を命じたという。

父は初めて弟を抱え上げることができた。父たちがどこへ向かったのかは判らなかった。人の噂では硫黄島へ行つたのだらうとのことだった。

◆敗戦

町では混乱が始まっていた。勝手に出歩かないようにと言う通達があり、街の米屋が朝鮮人に襲われたとか、警官がやられたとか、。。。さん一家はさつさと逃げ帰つたらしいとか、さまざま噂が飛び交った。

内地への引き揚げが決まったが、わが家は32歳の母と国民学校4年生のぼくを筆頭とする5人のコドモである。

◆朝鮮人青年に守られて

数日後、父の下で働いていた片山という青年がやってきて、「奥さん、何か困っていることはありませんか。必要があれば何とかします。それから何かあつたときはぼくの名前を出してください。ぼく、実は本名は崔と言います。この周辺の警備をやっています。引き揚げるとまではわたしどもがお守りしますから安心して下さい」と言ってくれた。彼は朝鮮人だったのだ。

問題は引き揚げてから先どうするかだった。父の故郷広島市は新型爆弾（原爆）で焼け野原だと言つので、九州の炭鉱町にいる親戚を頼ることにした。荷物は手に持てる物だけである。母は引き揚げてからは縫い物で生計を立てるのだと言つて、末の弟を背負い、重たいミシンの首だけを胸に抱えて帰ることにした。

2年生の弟が小さなリュックを背負つて学校へ上がる前の弟の手を引き、ぼくが大きなリュックを背負つてその下の妹を連れ、さらに毛布で包んだわずかな衣類をロープで引きずって歩くことにした。（以下、次回）

NPO現代座を支える人々

第二十回

織壁哲夫さん

記 武本英之



おりかわ てつお
東京都世田谷区生まれ。
2010年から川崎平右衛門
プロジェクトの事務局長。
趣味は料理、旅行好き、帰っ
たら紀行文を書いている。好
きな作家は司馬遼太郎。

小金井史跡巡りの案内役

ここ現代座のある小金井市には、野川というカワセミの飛来する美しい川が流れている。カワセミの事は置いて、憩いの場・野川公園の存在は市民なら知らぬ人はいない。が、その野川の周辺には、今から一万五千年前に縄文文化が、さらにそれより三万五千年前には旧石器文化が栄え、そのことを示す野川遺跡群が存在することを知らない。筆者も正直知りませんでした。その事を教えて下さったのが織壁さんだ。

織壁さんは小金井市の公民館のイベント「歴史散歩」の講師をボランティアで行っている。毎年、市内五地区に分けた名所旧跡を市民に案内して回っているそうだ。「この事は誰にも言わなかったが」と前置きして織壁さんが明かしたことは、「ご出身の都立大学（現・首都大学東京）で歴史学を専攻されていたこと。というのも、織壁さんは学生時代から大学生協の役員をされ、そのまま生協（コープ）の仕事に就かれ、以来、

五年前に六三歳で退職されるまでその道一筋。定年後の第二の人生に突入して歴史好きの性格がムクムクと頭をもたげ出したわけである。

再び歴史に目覚めてからは大忙しの毎日。小金井史談会の活動、江戸東京たてもの園でのボランティア、明治大学博物館の解説員等タスクジェニールは目白押し。有名な大学の大家が講義すると聞きつけては聴講したり、地方に卑弥呼の墓とされる前方後円墳の第一号を観に行ったりと「現役で仕事をしていた時の十倍くらい勉強しています」。本当に第二の人生を謳歌していますね、筆者はまだ現役、羨ましい限りです。

舞台にも登場

織壁さんの同じ歴史好き仲間の一年先輩がレポートNo58の「支える人々」で紹介した塚田善久さん。小金井のシニア世代の集まりであるシニアSOHOで二人は知り合いに。そこから川崎平右衛門と出会うまでは一瀉千里。2010年に川崎平右衛門プロジェクトが立ち上がり、二人は中心メンバーに。2014年にいよいよ上演となり、市民の間に上演を支援するサポーター会議が結成される。会議で侃侃諤諤（かんかんがくがく）し出したら、司会役の織壁さんにゲタが預けられ、ユーモアを持って丸く治めるらしい。

昨年九月の『武蔵野の歌が聞こえる』には織壁さんと塚田さんも農民の役で登場している。これは織壁さんが「市民の町おこしで上演するのだから市民からも舞台に登場したらいいなあ」と言ったら、「それはいい」ということになったらしい。まさか、本当に出演することになるとは思っていなかったらしいが、言い

出っっぱの責任をとって、出演することになった。

役者の虫もよみがえるか？

この『武蔵野の歌が聞こえる』は9月4日、8日、現代座ホールで再演される。織壁さんの再出演も決まっている。前回は合唱の一員で声を発したが、今度はちゃんとセリフもあるそうだ。

織壁さんが再び、誰にも話したことがないが」と言って話した内容には又びっくり。大学時代、演劇同好会にいて役者もやったことがある！という。出演した芝居はサミュエル・ベケットの不条理劇「ゴドーを待ちながら」。織壁さんの役はラッキーという犬の役。この犬は突如、哲学的なせりふを喋るという不思議な設定だが、実は台詞の意味をまったく理解できないまま終わってしまったと言う。

織壁さんは歴史を通じて川崎平右衛門を発見し、平右衛門を通じて現代座を知った。そして舞台に改めて立った。何だが、このステージは織壁さんにとって立つべくして立ったようなステージだという気がしてきますね。織壁さんが平右衛門プロジェクトに関わってからは現代座の芝居は「約束の水」「もくれんの歌」「ここは幸せゼロ番地」「ユーモレスク」等つぶさにご覧になっている。今回はご自身の歴史の蘊蓄をかたむけて一念発起、自ら脚本をご執筆されてはいかがでしよう。（了）



※このシリーズを担当している筆者の武本英之さんは専門紙「東京交通新聞」の編集局長。NPO現代座正会員でもあります。

小金井市に「平右衛門橋」が誕生

玉川上水の都立小金井公園正門前に、歩行者専用の人道橋ができました。橋の名前は「平右衛門橋」と命名されました。

7月31日9時から開通式が行われました。稲葉小金井市長の挨拶で平右衛門の業績が語られ、川崎平右衛門末裔の川崎家の方や「平右衛門橋」に応募された方が紹介され、地元の幼稚園児たちによるテープカットのあと、渡り初めが行われました。

NPO現代座の『武蔵野の歌が聞こえる』の出演者たちとプロジェクト、サポーターの皆さんも、のぼりを掲げて橋を渡りました。そして集まっていた皆さんに公演のチラシを配りました。



小金井市長（後列左から2人目）も平右衛門プロジェクトやサポーターと一緒に記念写真
・加賀谷公一さん撮影

「日本力行会」で講座

今年で3年目になる「アリアンサ移住地」の講座を、5月から7月にかけて「日本力行会」で行いました。これはブラジルのサンパウロ州の奥地にある、日本力行会が中心になって創設した「アリアンサ移住地」の歴史を、木村快が語る講座です。

今年の受講生は、そのアリアンサ移住地にある「ユバ農場」の弓場あかねさん。今年の力行会のブラジルからの研修生はあかねさんひとりでしたが、昨年もいっしょに勉強した日本ウエルネス・スポーツ専門学校に留学中のユバ農場の矢崎夏さんが今年も参加してくれました。2人はアリアンサのユバ農場で生まれ育ったのですから、単なる歴史の勉強ではなく、具体的な話ができます。木村快も新しい資料を作って講座に臨みました。

講座のあとは食事をしながら、彼女たちの話を聞かせてもらいました。日本人についての彼女たちの問題意識は、非常に鋭くて、考えさせられることばかりでした。



左・矢崎夏さん 右・弓場あかねさん

現代座会館 5月～7月 活動日誌

5月	6月	7月
10日 「現代座レポート62号」発送作業	1日 「武蔵野の歌が聞こえる」サポーター会議	5日 「武蔵野の歌が聞こえる」サポーター会議
15日 シンポジウム「川崎平右衛門とその時代」	3日 日本力行会で講座「アリアンサ移住地」②	9日 「武蔵野の歌」ピアニストと作曲家の稽古
20日 日本力行会で講座「アリアンサ移住地」①	18日 「緑町ふれあいサロン」	11・12日 「武蔵野の歌が聞こえる」テーブル稽古
21日 「緑町ふれあいサロン」	29日 「平右衛門プロジェクト」会議	15日 日本力行会で講座「アリアンサ移住地」③
22日 「SPレコード雑談会」	31日 「SPレコード雑談会」	16日 「緑町ふれあいサロン」
		31日 「平右衛門橋」開通式

【現代座ホール】

4月30～5月5日	「シアター青芸」稽古
5月24～30日	「希望舞台」稽古
6月8～7月5日	「クロジ」稽古
7月9～12日	演劇サークル「夢さしの」公演

【三階小ホール】

5月9～23日	「希望舞台」稽古
6月1日	「女声合唱団」練習
6月17日	飯村先生歌の講座「夢風船」
6月20・21日	「昭和のコードモが伝えたいこと」第1回
6月28日	津田コンサート「湯山昭はお好き」
7月15日	飯村先生歌の講座「夢風船」
7月26日	津田「リトル・コンサート」
8月1・2日	「昭和のコードモが伝えたいこと」第2回

【定期使用 二階サロン】

毎日曜日	早稲田ラジオスクール（学生支援）
毎月曜日	子どもクラブ・バンビーン
毎水曜日	熟年パソコンサークル
隔木曜日	iPad熟年講座
毎火曜日	東志野香のヨガ教室（3F）

武蔵野を協同の大地に変えた川崎平右衛門

合唱構成劇『武蔵野の歌が聞こえる』

脚本・演出：木村快 音楽：福沢達郎

2015年9月4日(金) 14:00 19:00
 5日(土) 14:00 19:00
 6日(日) 14:00
 7日(月) 14:00 19:00
 8日(火) 14:00

会場 現代座ホール

参加費 大人 3000円 小中高 1000円

各回 80人の予約制です。

事前にお申し込みください。

「昭和のコドモが伝えたいこと」第3回

戦時中の紙芝居『明朗一票』：長谷川葉月

木村快の話『海外植民地のコドモたち2』

10月11日(日) 12日(祝) 14:00 ~ 16:15

参加費：2000円(コーヒー、クッキー付き)

現代座3F小ホール 各回30人の予約制です

「遠い空の下のご郷」

～ハンセン病療養所に生きて～

日時：9月11日(金) 13:00

会場：長野市 善光寺大本願・長野県仏教婦人会総会

語り：木下美智子 演奏：松本真理子

「長谷川葉月の朗読教室」開講します

基礎訓練から舞台での発表まで(12回講座)

- ・開講期間 2015年10月～3月(6ヶ月間)
- ・日時 毎月第2・第4水曜日(原則) 3月のみ第3・第4水曜日
全12回、最終月の3月は舞台稽古と発表会本番になります。
午後1:30～3:30(人数によって終了時間変更あり)

- ・募集定員 10名
- ・受講料 15000円(全12回、発表会費用も含む)

近代から現代の文学作品などをテキストにした、初心者向けの講座です。
朗読に大切な発声の技法と、口をきれいに動かすための基礎訓練を取り入れ、
朗読に適した声作りをしていきます。

まずはテキストを全員で読み分けして、作品を読む楽しみを味わいましょう。
2月には各自が発表作品を練習し、3月にその成果を舞台上で発表しましょう。



体験講座

9月30日(水)
午後1:30～3:30
参加費 1000円

ご予約ください

※お申し込みは上記NPO現代座まで

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費(現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円
 協賛会員 10,000円(1口以上)
 郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座